

優秀賞

「やらせろ願う」

作・なないろ みほ

あらすじ

美和（10）はまだ赤ん坊の妹ひなたをうとましく思っていた。

両親はひなたにつきつきりで夏休みだというのに家族そろって遊園地にもカラオケにも行けない。

美和が留守番をしていると、河童がやってくる。河童は、美和が腹いせで川に投げた石のおかげで相撲に勝った、お礼になんでもひとつだけ願いを叶えると言う。

何を願おうか悩む美和。すると、ひなたが大きな声で泣き出す。「静かにして！」と美和が怒ると、それを願いだと勘違いした河童が、美和を消してしまう。

美和以外の人間に、ひなたの記憶はなくなっている。

美和はひなたのいない家族団らんを楽しむが、しだいに寂しさと罪悪感を覚える。

美和は川に行き河童を呼び出して、「願い

はなかったことにして欲しい」と言う。河童は「一度願ったことは変えられない」「お前が代わりになるか」と聞く。

10年後、10歳になったひなたは母親と共に川の事故で死んだ美和のために、花をたむける。

人物

小野美和（10）小学生

小野ひなた（1）（10）美和の妹

河童 オス

小野佳世子（35）（44）美和の母

守男（35）美和の父

蝉の鳴き声。

たい

守男「今日はひなたの予防接種の日だから」

美和「二人で行こうよ」

守男「ママ一人で病院行くのは大変だ。いつ

しよに行くから、遊園地は今度な」

美和「うん」

ドアが閉まり、カギがかかる音。

ひなた「(泣き声)」

美和「ママ。映画に行きたい」

佳世子「今度お父さんの休みの日にね」

美和「お母さんで行きたいの」

ひなた「(泣き声)」

佳世子「ひなちゃんがいるから無理よ」

美和N「ひなたが生まれてから、全然遊びに

行けない。カラオケもダメ、レストランも

ダメ。これじゃ、何のための夏休みかわか

らないよ」

ひなた「ううう(ぐずる)」

美和「あ、やばい。泣きそう。ひなちゃん」

玩具のガラガラを鳴らす音。

美和N「妹のひなたが生まれてから、ずっと

お母さんはひなたにつきつきり。夏休みな

のどこにも行けない。妹が生まれるって

すぐ嬉しかったのは最初だけ。泣き声は

うるさいし」

蝉の鳴き声。

佳世子「あ、オムツ切れちゃってる。美和」

美和「なに、ママ」

佳世子「ドラッグストアに行つて来る。10分

で戻るから、ひなちゃん見てて」

美和「……うん」

佳世子「美和、お姉ちゃんだもんね。お願い」

楽しいね」

ひなた「(泣き始める)」

美和「も、なんで泣くの？ おむつ？ お

っぱい？ わかんないよ」

ドアを叩く音。

ひなた「(きやつきやと笑う声)」

守男「よーしよーし。今日はご機嫌だな」

美和「パパ。城島のジェットコースター行き

美和「誰だろ。郵便？」

童や

河童「そんな時、川ん底でわしや仲間と相撲う

ひなた「（泣き声）」

美和「ええっ？ いま、河童って言った？」

とつちよったんや。一進一退、なかなか勝

美和「開けなくてもいいよね。ママいない

河童「はい。春木川に住む河童です。昨日、あ

負がつかんところに、あんたん投げた石が

し」

んたは川に石う投げたね」

わしん相手ん頭に当たったんや。おかげで

ドアを叩く音。

美和M「私は思い出した」

もいい顔がでくる」

ひなた「（泣く声）」

川の流れる音。

美和「ええっ」

美和「泣かないでよ」

美和「みんな私なんかどうでもいいんだ。マ

あがっちきたんや」

ドアを叩く音。

マのバカ！ パパのバカ！ えいっ」

美和「まるで鶴の恩返しみたい」

美和「なんで玄関のチャイム鳴らさないんだ

石が川に落ちる音。

美和「本当に？ 本当に願いを叶えてくれる

ろ。変なの」

ひなた「（泣く声）」

美和M「怒りにまかせて春木川に石を投げ

河童「ええ、ひとつだけ」

美和「おむつじゃないな。どうしよう」

た」

美和「ううん。願うだけならタダだよ。でも

河童「こんにちは。こんにちは」

願いなんて沢山あります。お金をたくさん

美和「あれ、誰だろう？」

蝉の声。

んとか。運動神経がよくなって、クラスで

河童「こんにちは。昨日助けちいただいた河

一番足が速くなるのもいいな」

河童「ひとつだけやわあ」

美和「ううん。悩むなあ」

ひなた「（泣き声）」

美和「ひなた、泣かないですよ。今考えてるん

だから」

ひなた「（泣き声）」

美和「ひなた。静かにして！」

河童「それが願いか？」

美和「ええっ？」

河童「わかった。願いうちえようえ」

美和「ええっ？ ちょっと待って！ 河童さ

ん！」

ドアが開く音。

美和N「ドアを開いても、そこには誰もいな

かった。水たまりがあつて、魚屋さんみ

たいな生臭い臭いした」

美和「誰もいない。やっぱり誰かの冗談だっ

たのかな。あーあ、確かにひなたは泣きや

んだみたい。変な願い事しちゃったなあ。

どうせなら1億円にすればよかったなあ」

佳世子「美和、どうしたの。キョロキョロし

て」

美和「ママ。おかえり」

佳世子「ただいま」

美和「あれ？ オムツ買いに行ったんじゃない

かったの？」

佳世子「オムツ？」

美和「ひなたのオムツを買いに行ったんでし

よ？」

佳世子「ひなたって誰？」

美和「ひなたはひなただよ。妹のひなた」

佳世子「何を言ってるの。あなた一人っ子で

しょ」

美和「ええっ？ ママ、何を言ってるの？」

佳世子「美和、寝ぼけてるんじゃないの？」

美和「ええっ？ だって、ひなた、いるじゃん

そこに」

佳世子「ふふっ。どこ？」

美和「ええっ！ いない。ひなたがいない！

どこ？」

佳世子「ほら、いないでしょう」

美和「赤ちゃんベッドもない。何もない。ど

うして」

佳世子「あなた、夢を見たのよ」

美和「夢じゃないって！ あっ！ まさか、

『静かにして』って言ったから？ ひなた

がいなくなつた？ どうしよう。私のせい

で。ママ」

佳世子「美和。あなた、夢を見たのよ」

美和「違う」

佳世子「夢よ」

美和「ううん……」

佳世子「美和、暑いし、お昼どっか食べに行

こっか」

美和「えっ？ うん、行く行く！ ママと二人で食へに行くの、ひさしぶり！」
佳世子「あら、確かにそうね。どうしてだったかしら」

美和「パパ、カラオケ行きたい」
守男「夏休みだもんな。よし、パパも福山雅治熱唱しちゃうぞ」

美和M「ひなたがいないと、こんなにたくさん遊べる。パパもママも、私だけのパパとママ」

美和「ふふっ」
佳世子「「きげんね」
美和「毎日楽しいもん」
佳世子「夏休みだもんね」
美和「ふふっ。それだけじゃないけどね」
赤ん坊「（泣く声）」

美和「はっ」
佳世子「？ 何したの、美和」
美和「あそこに、赤ちゃんを抱いた女の人がいる」

佳世子「そうね。美和もあんな風だったのよ」
美和「そう……」
赤ん坊「（泣く声）」
美和「ひなた……」

佳世子「わかった。弟か妹が欲しいんでしょ」
美和「ううん。いらんよ」
佳世子「あら、そう？」
美和「赤ちゃんがいたら、ママもパパもとられちゃうもん」
佳世子「ふふ。そうかもね」
美和「いらんよ。赤ちゃんなんて。いらんよ！」
佳世子「どうしたの美和、そんなにムキにな

って」
美和「なんでもない」
ドアが閉まる音。

美和「ただいま。静かだな。ひなたがいないと、家がこんなに静かなんだ」
佳世子「おかえり。今日は美和の好きなりだよ」

美和「うん……」
佳世子「元気なのね、どうしたの」
美和「なんでもない」
佳世子「そう？」

玩具のガラガラが鳴る音。
美和「あつ！ この音！ ひなたのガラガラ！ どこ？ どこにあるの？」
佳世子「美和。押入れひっくり返して、いっ

たい何を探しているの？」

美和「あ、あった！ ママ、見て、これ！」

佳世子「あら。ガラガラ」

美和「これ、誰のかわかる？ ひなたのだよ。

ひなたが好きだったガラガラ」

佳世子「美和、何を言ってるの？ それはあ

なたの小さい時のガラガラよ」

美和「違うよ、ひなたのだよ。ママ。思い出し

て。私の妹のひなた」

佳世子「美和。あなたはひとりっ子。妹はい

ないの」

美和「いる！ いるんだよ！」

佳世子「あつ、美和！ どこへ行くの！」

川の流れる音。

美和「たしか、ここらへんだ。私が川に石を

投げたのは、おーい！ 河童さん！

：返事、ないな。おーい！ 石、投げてみ

よう。えいっ！ 河童！ 出て来い！ え

いっ！」

美和N「その時、川の中から真つ黒な影がぬ

うっと浮かんできた」

河童「何か御用か」

美和「河童さん。あの、あの願い、元通りにし

て欲しいの。ひなたを返して」

河童「あんたん望みゆ叶えたにい、いったい

何が不満なんやろう」

美和「最初はいなくなって、静かでないなと

思った。ママもパパも私だけを見てくれる

し。でも違う。やっぱり違う。ひなたがい

ないと寂しいの。お願い河童さん、元に戻

して。ひなたを返して。私のたった一人の

妹」

河童「願いう叶ゆるんはただひとつだけや。

一度願った事あ取り消せん」

美和「そんな。そこを何とか、お願い」

河童「どげえしてん、叶えてえちようん

か」

美和「うん」

河童「お前がかわりになるが、それでもいい

んか」

美和「えっ？」

河童「どげえした。お前が妹んかわりに川に

入るんか」

川の流れる音。

佳世子（44）「ひなた。ひなた、そんなに

走らないで、危ないわ」

ひなた(10)「危ないって、私もう10歳だ

きやダメよ」

よ。あ、こちらへん？」

ひなた「うん。そうだね。花、ここに置くね。

佳世子「そうよ。あなたのお姉ちゃんの美和
が亡くなったところ。さ、花をたむけまし

じゃあね、お姉ちゃん」

よう」

川の流れる音。

ひなた「川でおぼれちゃったの？」

〈了〉

佳世子「うん、たぶんね」

ひなた「うん、そっかあ」

佳世子「あなた小さかったもの。まだ1歳だ

った。覚えてなくて当たり前よ」

ひなた「お姉ちゃん、かわいそうだね」

佳世子「でもね、苦しまなかったと思うの」

ひなた「え、どうして？」

佳世子「だってね、見つかったとき、美和の

口元は笑っていたんですって」

ひなた「へえ。ねえ、河童に尻子玉を取られ

ると笑っておぼれちゃうんだって学校で

聞いたんだけど。あ、……ごめん」

佳世子「ひなた、美和の分もしっかり生きな